

臼井吉見

事故のてんまつ



白井吉見
事故のてんまつ



筑摩書房

事故のてんまつ

© 臼井吉見
一九七七

一九七七年五月三〇日第一刷発行

著者 臼井吉見

発行者 井上達三

印刷 明和印刷
製本 和田製本

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替東京六一四一二三
電話東京二九一七六五一

事故のてんまつ

装帧
栞折久美子

前篇

先生がはじめてうちへ見えたきっかけは、京浜銀行頭取の阿部さんとのいんねんからだ
った。

阿部さんは、黒四ダムへ行く途中、うちの庭口に並べてある盆栽に目をつけたらしく、
すぐ車をおりて、ひとりで熱心に見ていたそうだ。父が出て行くと、この槇柏はすばらし
いですね、どこで見つけましたか？ といきなり、声をかけたということだ。今晚はあっ
ちで泊って、明日のひるころ寄りますから、と言いいいて、名刺をわたすと、さっさと車
に乗りこんだ。口べたな父は、ひとこともしゃべるひまがなかったということだ。

翌日阿部さんがきたのは、くれがた近くだったようだ。榎柏の鉢を父の言いなり二十五万円で買った。父の自慢の鉢の一つだった。持ち帰って、高いと思われたら、いつでも二十五万円で引取りますから、という、いや、高くない、高くないといって、大分ごきげんだったそうだ。わたしは、前日も当日も家にいたのだが、夕飯のとき、そんな話を聞いただけで、阿部さんのうしろすがたも見かけなかった。

阿部さんは鎌倉にお住まいで、先生とはかねて親しい間柄だとか。そんなところから、あの榎柏が先生のおめがねにかなったものと見える。いずれにしても、うちのことが話題になって、ほかに、ほしいものがあつたぐらいの話が出たのだろう。もっとも、こんなことのわかつたのは、後になってからの話で、榎柏を買った阿部さんが先生とお知りあいだなんて、わたしどもが知ろうはずはなかった。

ともかく先生がうちへ見える前年の夏のはじめのことだった。だから、先生がはじめて、うちへ寄られたのは、阿部さんが見えたあくるとしの三月の終り近く、桜のつぼみがまだかたいころではなかったかと思う。

庭に誰か来ていると気づいてからでも、たっぷり三十分はたった。さっきまで、そこに

いた父が見えないので、わたしが出て行くと、背のひくい、チンチクリンな（失礼）老紳士が、棚に並んでいる盆栽の鉢をじっと見つめていた。顔いろが黒ずんで、白髪には櫛を入れたことがないようで、ぼうぼうにみだれている。おかしいほど長いこと見入っては、次の鉢へ目を移す。ここでもまた、仕掛けられたみたいに、身じろぎもしないで、見入っている。盆栽好きは、誰だって長いこと見つめるのが、むしろあたりまえだ。この老紳士ときたら、あたりまえなんものではなかった。どう考えても、おかしいくらい、穴のあくほど、見入っていた。ようやく、わたしに気がついたらしく、顔をあげて、こっちを見た。痩せて小柄、貧相で、小さな顔のくせに、とんびみたいな鋭い目をぎろりと光らせて、わたしの方をじーっと見た。思わずゾツとした。とんびの目は、わたしを見据えたまま、ひとことも口をきかなかった。気味がわるかった。へんな人だと思った。こんな妙なひとには、これまで会ったことも見たこともなかった。みみずくのように立てた耳の恰好も異様だった。

逃げ出すように、わたしは庭をまわって、納屋をのぞいてみた。はたして父は、なにかがそこそやっていた。いきなり、父の腕を引っぱって、目つきで表のほうをさした。けげ

んそんな顔つきだった父が、客と察して、そっちへ去るのを見送ってから、わたしは家へ入ってしまったので、あとのことは知らなかった。

客との交渉がすんで、家へ戻った父は、不思議な人だよ、おれも庭師をして長いが、あんな客ってはじめでさ、とつぶやいてみせた。日本人だろうか？　ともいった。しきりに頭をかしげていた。あまりものをしゃべらなかったそうだが、このうちへは一度来てみたいと思っていた、とひとりごとみたいに言っていたそうさ。うちのことを知ってるような口ぶりだったが、とんと腑におちねえ、見当もつかねえ、どうもへんだ。——そんなことをくりかえしてるので、おかしなお父さん、聞いてみたらよかったじゃない、っていうと、そんなこといったっておまえ……と言いかけたきり、だまってしまった。日ごろ無口な父ではあったが、あの客には、なにか気を吞まれちゃったのじゃないかしら、と思った。名前はおろか、住所も職業もわからずじまい、なぜ、うちを知っていたかさえ聞きそこなったようだ。あの人を思いうかべると、父がそんな遠慮をしなければならなかった気持ちもわからないではない。それにしても、父も父だと思った。わたしには、ひとことも口をきいてくれなかったけれど、父とはともかく言葉を交したのだから。

人がからみて、阿部さんみたいな銀行家じゃなし、そうかてって社長でもねえ、裕福なあきんどの旦那さんともちがうし……さっぱり手がかりがねえナ。父は、まだそんなことをくりかえしていた。五葉松とエゾ松とヒノキの鉢三つを、父の言いなりに、五十三万円とかを支払って、また来ますよ、と気軽に言いおいたまま、帰って行ったそうだ。車に乗りしな、はじめて、ふくみ笑いに近い表情が動いただけで、それまではずーと、お面をつけてるみたいな感じだったって。

クロヨンのおかげで、うちへも珍しいお客がくるようになったナと、父はひとりじめにしていたが、これもあとでわかったことだけれど、先生はクロヨンの帰りなんかではなかった。この町に用事があって来て、浅間温泉だかに泊っていたのに、思いついて、わざわざ戻って、うちへ見えたのだが、そんなこと、そのときは、ゆめにも知らなかった。

萬屋の登紀子さんが、お茶の水女子大受験のため、近く上京するということで、激励に行つて、いつものように、裏の庭園の、あずま屋でおしゃべりしてるうちに、話がはずんで、このごろ見えた、へんな東京の客（わたしはそうきめこんでいた）のことになった。登紀子さんたら、とたんに聞き耳を立てて、え？ とんびの目だって？ 背がひくくて、小柄

で？ ごま塩髪がぼうぼうですって？ 念をおしてたしかめると、不意にとんきような大声を出して、お父さま！ お父さま！ と呼びかけた。鳶屋のおじさんは、座敷で雑誌をなんか読んでたが、登紀子さんの声に驚いたように、頭をあげてこっちを見た。やにわに登紀子さんは、とび出して行って、縁がわ越しに、おじさんと何か言葉を交していた。と、おじさんは立ちあがって縁がわまで出ると、縫子さァん！ 縫子さァん！ とわたしを手招きした。

わたしは、鳶屋へ行っても、たいていは庭のあずま屋で、登紀子さんと話すだけで、座敷へあがるどころか、母屋に近づくさえ、なんだか気が進まなかった。だまっていたが、おじさんがしきりに呼びたてて、きまりがわるいので、縁がわに近づく、おじさんはわたしの手を引っぱって、あがれ、あがれという。どうしてもいやなので、ふりはらって、縁がわに腰をかけると、縫子さん！ いま登紀子から聞いたが、庭繁（にわもぎ）へ来たという珍客は、ひよっとしたら、とんでもない大ものかもしれないよ、とんびのような目をして、小柄で痩せてだって？ と早くも昂奮気味のよう。

大ものってなーに？ みるからに政治家なんかじゃないわ、っていうと、政治家どころ

か、ノーベル賞だよ！　ノーベル賞の大先生だよ！　それにきまつてる！　と、立てつづけに叫んだ。わたしもそう思うわ、きつとそうよ、と登紀子さんが加勢する。わたしは、ただもうびっくり。もともと、わたしは、美弥子や時枝のような文学少女どころか、登紀子さんなみの文学好きでもなかったから、小説なんて、めったに読まなかったし、先生のものでは、美弥子にいわれて、「高原」という短篇集を読んだぐらい。有名な「伊豆の踊子」だって、松本の映画館では見たが、読んだことはない。「高原」なんかを読んだのは、そのなかの「戸隠の巫女」に、遠山部隊のことが出ているよ、と教えられたからだ。松太郎兄さんが、遠山部隊の看護兵で出征して戦死したので、学校の図書室や町の図書館から、遠山部隊の記事の載った新聞雑誌は、片っぱしから読んで、書きぬいてもいたので、さっそく、たくさん並んでいた先生の小説のなかから、「高原」をさがし出して読んでみた。

「戸隠の巫女」は、「北支那で戦う遠山部隊の原隊へ、昭和十二年九月二十八日午後四時過ぎ、二十枚近い長文の電報が配達された。官報至急報である。副官の吉越大尉は、電報を握って、山本中佐のところに駆けつけた。果して、死傷者の報せだ。遠山部隊は信濃の人である。」——のつけから、いきなり、こんなふうに、遠山部隊だの、吉越副官だの、山

本中佐だのと、すでに過ぎ去った時代ではあっても、郷土部隊としてなじみだった名前が出てくるので、さてはと、どきどきして、読み進めて行っただが、ただそれだけのことで、かんじんの遠山部隊については、別になにか書かれているわけではなかった。戸隠の神官の娘に、信越線の柏原駅で迎えられた作者が、一茶が晩年住んだ土蔵や墓をたずねてから、バスで戸隠へのぼって、あそこの中社で神楽舞を拝観することなどが、北信濃の秋色をまじえて、随筆ふうに綴った紀行文まがいの小説といえ、そうも思えるもの。そうそう、案内役の神官の娘が、林檎畑を経営していた恋人だか、いいなすけだかを戦地へとられている、そんなすじのものだった。ちがうかもしれない。いまは、おおかた忘れてしまっている。ともかく、娘の恋人の兵隊にしたところで、遠山部隊所属というわけではなかったように覚えている。いずれにしろ、長兄松太郎看護兵の動きを偲ぶ手がかりは、一行もみあたらなかった。なにか、のんきすぎて、ひどくもの足らなかった覚えがある。いまになって考えてみると、のんきすぎるの、もの足らないのと思ったのは、先生に申訳ないことだったと反省している。

当時は文学者にしろ、学者にしろ、おおかたは、戦争の讃美者でないまでも、協力者で

なかった者など、めったには見当らなかったらしい。「高原」には、戦争反対の声はひびかしてはいないけれど、戦争無視、戦争への無関心を装うことで、時代に対する抵抗を精いつばい示したものだつたようにも思われる。中学の図書室で読んだ「戸隠の巫女」には、作者と神官の娘との問答のなかに、削除だか伏字だかがあつたように覚えている。近いうちに、ぜひ読みかえしてみたい。

でも、あのころは、そんな反省はしなかったし、もともと文学好きなんかではなかったから、三年前、わたしが高校へ入学したとしの十月、先生がノーベル賞をもらつて、テレビ、新聞、雑誌が大さわぎしたときも、わたしは、美弥子や時枝みたいに有頂天になれなかったのはいうまでもないが、国語のカナヤンは無理ないとして、いいとしをした（失礼）英語のケルケまで、まきこまれて、夢中になったのには、いささか驚いた。といえ、いかにも生意気に思われるだろうが、決して、そんなことはない。つまりは、文学とか小説とかよりは、数学の好きな生徒だつたということだろう。そんなわけで、あの不思議な客をじかに見ても、先生などとは、結びつきようはなく、思つてもみなかったことだつた。なるほど、いわれてみれば、ノーベル賞をおもひになつたとき、先生の姿や顔は、毎日

のようにテレビや新聞に出たから、まるきり連想がはたらかなかったのは、うかつだったかもしれない。だが、そんなうかつなわたしよりも、とんびみたいな目とただで、萬屋のおじさんばかりか、登紀子さんまで、即座に先生を思いうかべるほうが、わたしには合点がいかない。

それにしても、ノーベル賞の小説家ともあろう人が、前ぶれもなく、ふらっとうちの庭さきに現れるなんてことがあるだろうか？ テレビや新聞に出た写真をあれこれ思いうかべてみて、つい昨日見た実物のそれとは、うまくだぶってこない感じだった。そこへ、おじさんが、何かの文学全集の一冊をさがし出してきて、これだろう、この人だろうと、口絵の写真をつきつけた。受けとって、とくと吟味したが、似てるようでもあり、似てないようでもある。胸から上だから、あのチンチクリン（失礼）と同一人物かどうか、これだけでは無論わからない。いろの黒いのも判別がつかない。顔の輪廓は、似てると思えば、似てるようにも思う。一番似てるのは頭の恰好だが、かんじんの、とんびの目は、これがどうやら別人のように思われてならない。写真のそれは、あの実物みたいに、決して鋭くもないし、ギョロついてもいいない。全体として、別人のポシビリティが高いというのが、

わたしの最終判断だった。

薦屋のおじさんたら、おもしろいといったらいいか、もの好きといったらいいか、とにかくおもしろがりたいたいで、うちへ来た、へんな訪問客を天下のノーベル賞作家と確認したいらしく、わたしがそれを素直に肯定しないのが、いかにもじれったそうだった。しいには、電話でケルケを呼び出して、いまおもしろい事件がおこって、相談があるからと、召集をかけたのには、あきれてしまった。ケルケのところは、薦屋の分家で、いと同じ士でもあるので、さっそく洋服に下駄をつっかけてやって来た。

事件(?) についてのおじさんの解説は、昨日の来訪者がノーベル賞作家であつてほしいという期待が先に立って、思わず説得力がこもって、おかしかった。だまって聞いていたケルケは、二三の質問をわたしに試みてから、しばらく考えこんでいたが、いや、ちがうだろう、残念だが別人だね、こんな町へ鶴が一羽で舞いおりるはずがないよと、声をたてて笑った。ノーベル賞作家ともあろう者が、クロヨン見物に、一人でやってくるはずがない。仮に孤独の旅を望んだからって、はたがゆるすものか。お伴なり、とりまきなりが、ついて来ないはずがない。わざわざ、こんなところへ立寄って、盆栽の二つや三つ、仕入

れなんでも、あの人なら、どんなものでも手にはいるはずだ。これがケルケ説だった。いさみ立ったおじさんも、みるみる失望のいろを濃くして、すっかりしよげてしまった。あのひと、案外ぬけ目のない人らしいよ、ともケルケは、つけ加えた。そんなことが、こんどの事件（？）と、どんな関係があるというのだろうか、とわたしは思った。

降って湧いたような椿事も、ケルケの一言で、瞬時にしよぼってしまった。ところが、それから数日後だった、鎌倉の先生から、だしぬけに電話のあったのは。電話に出たのはわたしだった。

はじめに、若い女のひとの声が聞えて、鎌倉の何トカカントカと早口だったので、よく聞きとれなかった。つづいて、いま思えば先生の声だったが、低い、ひびきのない言い方で、いきなり、エゾ松もヒノキも、しごくごきげんがいい、見つけものだった、ついては、何とかを持って来てくれないか、とかいう内容のものだった。先ごろの不思議な客とは勘づいたが、ノーベル賞作家の声という感じはなかった。なにを持って来いというのか、聞きとれなかったので、聞きかえしたが、イチ何とかいうだけで、よくわからなかった。